

る革命の思想に至つては斷乎としてこれを認めず、我が獨得の尊嚴なる國體を維持する以外、如何なる革命をも認めなかつたのである。だから外來文化たる儒教がわが文化、わが國民道德の上に大なる影響を及ぼしたことはいふまでもないことであるが、然もこれを我が國民固有の精神と背馳せざる範圍内に於て攝取したのであつて、すべてをその儘に受け入れたのではない。そうして我が國民精神に背馳しない範圍内の儒教學說に於ては、支那に發達した學說の上に更に一步を進めて獨自の見を立てるやうな域にまで進んだものがあるのである。

さてこの次第を、支那文化の影響を被つた東亞諸國の状態と比較して見るに、此等の諸國はいづれもその文化發達の程度に於て支那よりも低級であり、従つてみなその文化を受け入れて自己の文化を高めることに努めたことは我が國に於けると同様であるが、然もこれらの諸國ではこゝに述べた儒教の如きについても、これをそのままに受け入れ、革命思想の如きもみなこれを認めて居る。凡そ何れの國でもその國祚の永久を祈らざるものはないのであつて、國を立てる時は萬世不易の礎を立てた積りなのであるが、その精神が間もなく動搖し、争亂を演じて倒れてしまつたのは、本來その國體觀念に於て我が國に於けるが如き尊嚴なるものを有しない爲に外ならぬ。従つて革命思想の如きに至つても儒教の輸入と共にそのまゝにこれを受け入れざるを得ないのであつて、これを以て新朝の興起を理由づけること、全く本家の支那に於けると同様である。等しく儒教の影響を受けながら、此の思想を侵入し得ざらしめたのは獨り我が國あるのみで、この點今更に我が國體の尊嚴無比を肝銘しなければならぬ。

次に我が文化に最も大なる影響を及ぼしたものの一つとして、前述べたところに關聯して、我が國に行はれた文字について考へて見よう。我が國に於ける文字の使用は、前述の漢學の渡來に伴うて、漢字の輸入せられたのに始